

肉筆浮世絵保存修復研究ノート

馬場 秀雄

はじめに

浮世絵は版画作品が良く知られていますが、一方では肉筆画の存在があります。特別注文の1点制作である肉筆画作品に浮世絵師たちは、持てる技量の全てをつぎ込んだように思われます。

肉筆浮世絵の修復過程から得られた情報を考察し、報告いたします。

修復対象作品は絹本に描かれた喜多川歌麿の「三美人図」であり、表装形態は掛幅装です。



作品解説は講談社の「肉筆浮世絵大観第6巻」から引用しております。

三美人図 喜多川歌麿

寛政年間（1789～1801）

絹本著色 掛幅

「浮世絵の華といえはまず、喜多川歌麿（1753?～1801）の美人画にとどめをさす。錦絵においてはもとよりのこと、肉筆画の分野でも、その事情は変わることがない。ところが、一口に歌麿の肉筆美人画といっても、確実な作品ということになると意外なほどわずかしか遺っていないものである。本図はその数少ない真正の歌麿肉筆画として、貴重な現存作品の一つなのである。

歌麿が江戸の女性たちの当世風の風俗を描き、浮世絵美人画界の第一人者として君臨したの

は、寛政年間を中心とするその晩年期であった。当時の江戸の町は、徳川家康の入城（天正十八年・1590）後ちょうど二百年を経過して、ようやく幕府所在の中心都市としての風格を備えるようになり、独自の文化を成熟させつつ繁栄を誇っていた。折しも寛政の改革という強引な引き締めこそ各方面に加えられたが、時の政治も歴史の趨勢を逆行させることはできず、現実の町人の生活は豊かに華やぐばかりであったようだ。本図では、この時期の市民生活の実相が、そこに生きる人々の気分までもいきいきとのせて、なまなましいほど率直に伝えられているように思われる。

ここに描かれる情景は、江戸市内のとある豊かな商家の奥まった一室で、母と娘、そしてお付きの女使用人が、夏の日々の暑さを忘れるべく楽の音を楽しもうとしているところらしい。中央で三味線の糸の加減を調節しているのがこの家の箱入娘で、赤い地に白の格子の間着に青色の薄い絹の表着をつけた振袖姿は、平安時代の宮廷婦人が楽しんだ襲の色目をやつしたように優雅である。その右方に座る黒地に緋の着物を着た婦人は、あいた口からお歯黒に染めた歯をのぞかせることから既婚の女性、若く見えるが実は娘の母という役どころなのだろう。やはり薄く織られた緋の生地は下着の赤い色を透かして見せており、胸にかけられた掛け守りの赤い紐や広い幅の緑の帯とともに、いまだ失われていない女性としての色香をひそやかにただよわせる。さすがに手馴れて、すでに音締を終えた三味線を左手に支えもち、涼しげな花模様の団扇を右手にもつ姿は、それ自体で美しく、また娘の若さと明るさを引き立てる役も果たしている。白地に藍の絞り染めの浴衣を着た左方の女性は、両膝を突いた姿で前髪の簪をさしており、かいがいしく立ち働いた直後の様子とうかがえる。あるいは、石菖を据えた青銅の水盤を部屋に運び込み、納涼の道具立てを一つ加えたところなのかもしれない。ちなみに、雲竜の文様をつけたこの銅製の異国的な水盤は、歌麿が好んで画材としたもので、ほぼ同じ形で「納涼美人図」（千葉市美術館蔵）にも描き込まれている。年齢も身分もそれぞれに異なる江戸女性の典型を三人登場させて、その仕草や表情をいかにもそれらしく性格づけて描写している。色彩も、娘の華麗、母の地味、女中の爽快と三様に変化させ、しかも全体として見事な調和がとれている。見れば見るほどに味わい深く、江戸の人たちの生活の気配がしみじみと伝わってくるような、まさに、歌麿美人画ひいては肉筆浮世絵美人画の傑作である。

画面右下に、「歌麿画」の署名があり、その下方には、上り竜と下り竜を両端に向き合わせてその間に「歌麿」の二字を朱文で示した円印が捺されている。いずれも捺印の標準的な例として、歌麿肉筆画の鑑識に役立てられるべきものである。」

（学習院大学文学部小林忠教授）



修理前全体



修理後

対象作品

名称	絹本著色 三美人図			
作者	喜多川歌麿			
形態	掛幅装			
員数	1幅			
寸法	総縦	129.2cm	総横	84.5cm
	本紙縦	47.5cm	本紙横	73.1cm

破損状況

- ・ 絵具、特に胡粉の剥落が著しい。
- ・ 左の人物（侍女）の腰から下の部分、絵具の表面が白くなっている。また、絹がかなり損傷を受けている。
- ・ 裂地部分に横折れが見られる。
- ・ 小さいが虫損が見られる。
- ・ 糊が硬く、筋と裂地のバランスが悪く折れを助長している。
- ・ 付けまわし部分に糊離れが見られる。
- ・ 軸棒と軸先の径があっていない。
- ・ 裂地が本紙に不釣り合いである。

修理概要

現在表装裂地は羽織裏様のものが用いられており、本紙とあっていない。糊が硬く、本紙に負担を与えている。そこで、表装裂地を新調し、本紙にふさわしい表装形態に改装を行い、三段表装とする。なお、本紙、裂地の硬さ、厚さのバランスも調整する。修復後は保存を考えて太芯保存箱に納める。

修理工程

- ・修理前の調査を行った。
- ・解体し、汚損除去を行った。
- ・剥落止めを施した。
- ・旧裏打ちを除去した。
- ・虫損部分に補絹を施した。
- ・本紙、裂地ともに美濃紙にて肌裏打ちを行った。(矢車、墨染め木灰媒染)
- ・美栖紙にて増し裏打ちを施した。
- ・付けまわしを行った。
- ・美栖紙にて中裏打ちを施した。
- ・宇陀紙にて総裏打ちを施した。
- ・仮張り後、充分乾燥期間をおいた。
- ・軸装の形態に仕上げ太芯保存箱に収納した。

修理後

寸法	総縦	181.0cm	総横	91.6cm
	本紙縦	47.5cm	本紙横	73.1cm

使用材料

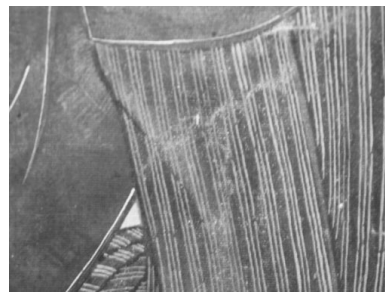
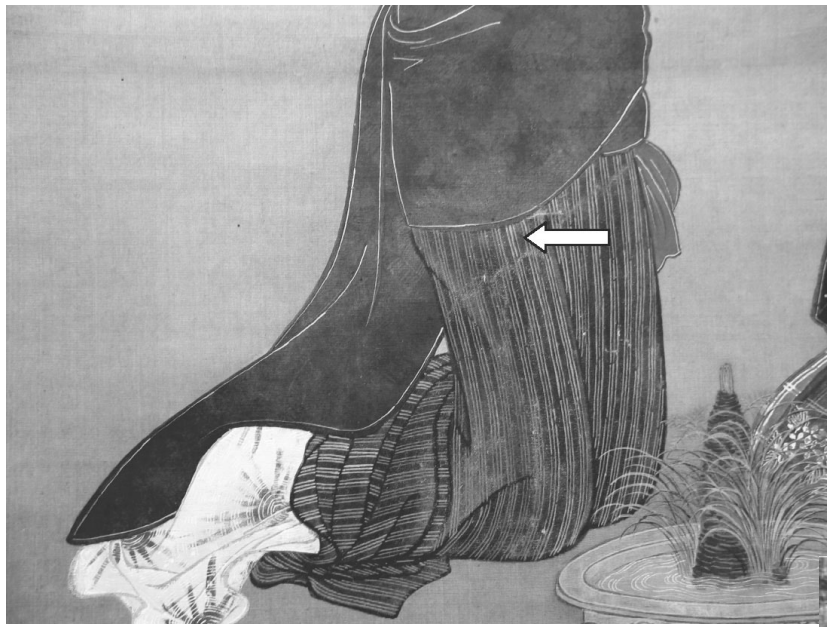
裂地	一文字	茶地本能寺金襴
	中縁	紺地和久田金襴
	天地	茶地七々子
裂地	廣信織物製	
美濃紙	長谷川製	
美栖紙	上窪製	
宇陀紙	福西製	



修理前 本紙部分



折れ



損傷部分



拡大写真



胡粉の剥落



胡粉の剥落



剥落止め





絹本（絹）の隙間が透ける構造から伝統的
絵画技法である裏彩色が施されている。

顔や手および団扇、浴衣部分には裏胡粉が
塗られている。

着物や帯の部分にも裏からの彩色が施され
ている。

裏・表から描き分けることにより画面に立
体感や鮮やかさ及び中間色の微妙な色彩を表
現できる。



考察

喜多川歌麿筆「三美人図」の解説文にもあるように、江戸時代寛政年間の豊かな商家の娘と母親および女中の姿をそれぞれに描きわけ、色彩においても年齢も身分も違う三人を三様に変化させ、しかも全体として見事に調和がとれている。まさに、歌麿美人画の傑作であると述べられています。

これらのことを裏付ける要素として、修復過程に現れた裏彩色の絵画技法があげられます。裏彩色の技法は平安時代の仏画にも視られる伝統的な絵画技法であります。基底材である絹本（絹織物）の隙間が透ける構造を利用して裏から絵の具を厚めに塗り、表からは薄めに塗り分けることにより画面に立体感や施彩の鮮やかさおよび中間色の微妙な色彩が表現できます。

絹本の両面から絵の具を塗ることは混色することではなく裏の色目を表現することなのです。これらを可能に出来るのは膠絵（日本画）の絵の具が天然の鉱物から作られているからです。「三美人図」においても随所に裏彩色技法が施され、歌麿ならではの肉筆浮世絵に仕上がっています。

おわりに

本作品を修復するに当たり、描かれた当時の歴史的背景（寛政年間）を調査するとともに歌麿が描いた肉筆浮世絵作品を何点かを拝見する機会を得ました。

歌麿が描く肉筆浮世絵に共通する何かを感じつつ、小林忠先生がお書きなされた作品解説を何度も読み込み、作品を描いた歌麿の「心情」に少しでも近づき、修復処置を通してその真正性に迫りたいと思いました。近年、ボストン美術館からの里帰り展覧「肉筆浮世絵展・江戸の誘惑」に見られるように修復現場からの報告により、修復処置の過程の中でのみ、観察することが出来る、「裏彩色」が話題になり肉筆浮世絵の研究に関心を寄せられています。修復処置を施すときは、美術史・学芸の専門家、保存科学者、修復家が対等の立場で主役である修復作品にとって何をなすべきか考える必要があります。

膠絵（日本画）は鑑賞や保存のために表装の形態をとります。本作品は掛幅装（掛軸）の形態をとっています。修復前の表装裂地は羽織裏地が使用されていました。今回の修復にあたり、所有者との協議の結果、三段表装の形態に改装しました。表装裂地の取り合わせには、肉筆浮世絵において、時にして見られる奇抜な表装仕立てを施すことを避け、本作品の持ち味である「品の良さ」にこだわりました。しかし、肉筆浮世絵美人画であることを踏まえて、中縁には明るくて粹な色合いの「紺地和久田金欄」を取り合わせて表装に色香をもたせました。

引用文献：肉筆浮世絵大観第6巻・出版社：講談社